

インテグラル思想研究会
インテグラル思想とエリート主義（第2回）
鈴木 規夫 Ph. D. (Norio001@nifty.com)
2006年5月14日（日曜日）

はじめに

ケン・ウィルバーは、人間の意識深化の過程における重要な転換点は、自らが「地獄」 (“Hell”) に生きていることを認識することを契機としてもたらされるものであるという。この転換は、人格の構造的成長をとおして成熟した認識能力が自己に内省的に向けられるとき、「解決」されるべき「問題・課題」が窮極的には「外界」ではなく「内界」に存在することの自覚をとおしてもたらされるものである。これは、自己の存在そのものを解決されるべき問題として体験するという、人間の成長過程において非常に画期的な自己との関係性を構築することになる。

そこでは、世界を体験する主体としての自己の根本的な責任が認識される。すなわち、世界を体験するとき、自らはありのままに世界を認知しているのではなく、実際には、認知という行為そのものをとおして常に世界の「創造」 (“enaction”) にたずさわっていることが認識されるのである。つまり、世界がいかにか体験されるのかを決定するのは、外界（他者）ではなく、むしろ、内界（自己）であるという内省的な自覚が確立されるのである。結果として、自らの幸福 (welfare) を決定する「責任の所在」は、外界（他者）から内界（自己）へと徐々に引きもどされていくことになる（「外向的方向性」 (“Outward Arc”) から「内向的方向性」 (“Inward Arc”) への心的ダイナミズムの転換）。こうした過程をとおして、人間は、はじめて真の意味で自己と対決することになる。そして、それは、「自己」という日常生活を可能とする基盤を動揺・麻痺させることをとおして、しばしば、人間を深刻な精神的危機へと追いこむことになる（「実存的危機」）。

ここにおいて、人間は、解決されるべき対象が、その瞬間、解決をこころみている主体である自己そのものであることを自覚する。今、解決策として想起することのできるものは、解決されなければならない自己により想起されるものであるために、自己の問題を温存するものとならざるをえない。つまり、この瞬間に自己の内部に存在する視野から発想される解決策は、全て無効とならざるをえないのである。このことが痛切に認識されるために、当人とり、解決をするということが果たしていかなることを意味するのかは、完全に想像の範囲をこえることになるのである。

自己が自己として存在することそのものが内包する問題と対峙するというこの内省の過程は、また、世界に人間として存在することが構造的に内包する諸々の限定条件の認識を醸成する（この成長段階においてとりわけ有効な療法とし

て認知されている実存主義心理学は、「死」・「孤独」・「自由」・「意味」をそうした構造的限定条件として認識する)。そして、これらの限定条件に構造的に特徴づけられる存在として自己を認識するとき、われわれは、人生を「無意識的地獄」 (“Unconscious Hell”) ではなく「意識的地獄」 (“Conscious Hell”) として体験するようになるのである。

インテグラル思想におけるインテグラル段階は、こうして自らが「地獄」に生きていることを認識することをおして、可能となるものであるという。こうした主張は、インテグラル思想が、自己の人間存在としての構造的な問題と長期的に格闘をすることをおしてしか獲得することのできない能力 (叡智) が存在することを尊重するものであることを示唆する。これからの時代において必要とされる「エリート」が備えるべき能力がいかなるものであるのかについて検討をする際、こうしたインテグラル思想の視点はいかなる洞察を提供してくれるだろうか。

インテグラル段階の叡智

「外向的方向性」から「内向的方向性」への心的ダイナミズムの転換は、体験というものが本質的に「創造行為」であることを認識させる (人間において、純粋な体験というものはありえず、むしろ、体験とは自らが内面化している個人的・集合的な解釈体系により構築されるものであるという認識)。こうした認識は、必然的に、思考と感情をその構成要素として包含する「意味構築活動」 (“Meaning-Making Activity”) に従事する存在として、自己を対象化することを可能とする。合理性段階から VL 段階への移行は、こうした非常に内省的な自己対象化を契機として醸成する内的均衡 (psychological equilibrium) の崩壊を「動力」として展開するプロセスである。

意識の発達段階

意識の段階的成長について採りあげるときに重要なことは、それが実際には非常に陰影に富んだプロセスであることに留意することである。とりわけ重要になるのが、段階間に存在する複数の過渡的段階 (transitional stages) の性質、そして、それらが個人の行動論理として具体的にどのように発現するかについて理解をすることである。¹ 例えば、Robert Keganは、段階間の移行を下記のような過渡的段階を経て展開する過程として説明する。

$$X \rightarrow X(Y) \rightarrow X/Y \rightarrow Y/X \rightarrow Y(X) \rightarrow Y$$

合理性段階から VL 段階への移行過程において、上記の過渡的段階は、具体的には、下記のように発現することになる。

❖ X : 合理性段階

- ❖ X (Y) : 合理性段階に重心が存在しているが、VL 段階の能力が明確に発現しはじめている段階
- ❖ X / Y : VL 段階に重心が移行しはじめているが、VL 段階の能力は、窮極的にはまだ合理性段階の行動論理にもとづいて運用されている段階
- ❖ Y / X : VL 段階に重心が確立するが、合理性段階の行動論理はいまだ強力に機能しており、内的なせめぎあいを経験されつづけている段階
- ❖ Y (X) : VL 段階に重心が確立されるが、合理性段階の行動論理があらためて顕在化しないように、継続的な自己観察をしている段階
- ❖ Y : VL 段階

“Mean Green Meme”

合理性段階から VL 段階への移行過程において発生する「病理」として、今日、インテグラル思想の研究者の注目を集めている“Mean Green Meme” (“Boomeritis”) の性質は、上記の過渡的段階に発現する行動論理を考慮すると、比較的容易に理解することができるだろう。

合理性構造は、自律的な判断能力を基盤にして、世界に存在する情報を咀嚼・融合して、独自の世界観（価値体系）を構築するという高度の認知能力を所有する意識構造である。その機能様式（modus operandi）は「概念」（concepts）を縦横に「操作」することである。この意識構造において、「概念」は、真の意味で現実性（reality）をもつ唯一のものとして絶対化され、結果として、「概念」をとおして把握されえないものは、しばしば、その正統性を無視・否定されることになる。VL 段階への移行は、合理性段階の意識構造の機能様式が内包するこうした構造的限界を克服しようとする内発的衝動により推進される。これは、自らの認識行為が本質的に概念を使用してしかなしえないことへの「苦痛」（Evolutionary thrust）、そして、それを克服する認識方法がありえることの直感（Involutionary thrust）により衝き動かされる垂直的なプロセスであるといえる。²

VL 段階への移行は、合理性段階までの意識構造の発達過程（“Outward Arc”）に息づいていた、知性存在（mental entity）としての自己の構築（複雑化）というダイナミズムそのものを克服（超越）しようとする画期的なプロセスである。そして、まさにそうした画期性のために、われわれにとり、それは非常に脅威的な体験とならざるをえない。それまでの人生をとおして自己の存在に「均衡」（equilibrium）をあたえてくれたダイナミズムを放棄して、そして、それを超越する機能に自己の存在をあずけることを要求されるのである（VL 段階への成長過程の前半段階において、普通、われわれは、そうした高次の機能が実際に存在することを明確に知ることはできない）。実際に、VL 段階に意識構造の重心の移行を完遂することのできる人間が非常に少ない現実の背景には（先進国においては、人口の 2% 以下といわれている）、この成長過程において要求される心的耐性（psychological resiliency）がとりわけ高度のものである事実が存在す

るのである。合理性段階から VL 段階への移行過程において発生する「病理」として認識されている Mean Green Meme は、上記のような困難のために、そこで突きつけられる発達上の課題を克服することに失敗するために生じるものといえることができるだろう。

David Ray Griffin (1989) は、Mean Green Meme を“deconstructive or eliminative postmodernism”と形容して、それを下記のように説明する。

It overcomes the modern worldview through an anti-worldview: it deconstructs or eliminates the ingredients necessary for a worldview, such as God, self, purpose, meaning, a real world, and truth as correspondence. While motivated in some cases by the ethical concern to forestall totalitarian systems, this type of postmodern thought issues in relativism, even nihilism. It could also be called *ultramodernism*, in that its eliminations result from carrying modern premises to their logical conclusions. (p. x)

つまり、Mean Green Meme は、合理性段階の意識構造の成立を可能としていた「世界観」を構築するための必要要素（例：「神」・「自己」・「目的」・「意味」・「世界」・「真実」）の妥当性を否定することをとおして、その限界を克服しようとするのである。しかし、人間の進化（深化）の過程において、破壊（否定）は、それそのものとしては、成長を保証するものではない。確かに、人間の垂直的な人格成長の過程において、既存の意識構造の均衡状態を動揺させることは必要となるが、普通、それは、高次の意識構造の可能性を直感する窮極的な信頼（Faith）に支えられている必要がある。そうした創造的な対抗要素の存在しないところでは、破壊は、既存の構造を溶解させることができるだけである。

「世界観」の否定を目的として着手される Mean Green Meme のこうした脱構築の作業は、合理性段階の意味構築機能を麻痺させ、個人・共同体から世界観を剥奪することになる。いうまでもなく、世界観の崩壊は、それを基盤として妥当性を獲得していた規範の崩壊をもたらすことになる。そして、それは、必然的に「公共性」の喪失を招来して、人間の生来の自己中心性の肥大化を奨励することになる。「世界観」の否定を目的として着手される Mean Green Meme のこうした脱構築の作業は、このように、自己中心主義の肥大化を奨励する特異な世界観を構築することにならざるをえないのである。

また、ケン・ウィルバーの指摘するように、Mean Green Meme は、「世界観」の否定を目的として展開する発想体系であるために、実際には、自らもまた独自の「世界観」を提唱していることに無意識となりがちである。結果として、その信奉者にとり、自らの内的な整合性の欠如（“performative contradiction”）を自覚することは、非常に困難になる。

概念への執着

Mean Green Memeの性質を上記のように理解すると、それが、窮極的には、VL段階への過渡的段階における成長の阻害であることが認識されるであろう。

ウィルバーの指摘するように、人間の垂直的成長は、Evolutionary Impulse (Eros) と Involutionary Impulse (Agape) の作用により展開するものである。また、自己の内部に作用するそうした対極的な衝動を抱擁して、根本的に未知のものである高次の段階への成長に建設的に取り組むことができるためには、人間は、変容のプロセスに根源的な信頼を抱くことができなければならない。上記のように、VL段階への成長過程においては、それが完全に未知の領域への跳躍であるために、こうした「信頼」の価値はとりわけ重要なものとなる。そして、まさにこの「信頼」の欠如こそが、Mean Green Memeを特徴づけるものなのである。

Mean Green Memeは、合理性段階の構造的限界を認識することのできる非常に高度の認知構造を所有する。しかし、その認知能力は、高次の意識構造を構築するために必要となる既存構造の均衡状態の動揺をもたらした後、VL段階の行動論理の修得へと発展的に展開することなく、あくまでも合理性段階の行動論理を基盤として、自己の存命を図ろうとする。VL段階の行動論理の「核」にあるのは、概念操作を停止して黙するという、概念を超越する認識領域の尊重とすることができるが、しかし、Mean Green Memeは、あくまでもその関心を概念という対象へと向けつづけ、それを「脱構築」することに執着しつづける。こうした概念（そして、概念の集積としての世界観）への飽くなき執着は、Mean Green Memeの基盤が、まさにそこにあることに起因するものである。また、「世界観の解体」という絶対化された目的のもと世界を再構築しようとするその行動論理は、合理性段階の行動論理を踏襲するものである。こうした既存の段階の行動論理への執着は、Mean Green Memeというものが、Outward Arcのダイナミズムを放棄して、Inward Arcのダイナミズムを抱擁することができるための心的耐性が欠落したところに発生する未成熟の副産物であるといえるだろう。³

VL 段階

上記のように、VL段階の行動論理の「核」にある「叡智」は、概念を超越する認識領域の尊重とすることができる。しかし、概念操作を停止してしたうえで、観想者としての観点から世界と向きあうという姿勢は、決して、概念（世界観）というものの価値を否定するものではない。むしろ、VL段階では、世界観というものが、（それが概念により構成されるものであるという意味で）構造的な問題を内蔵したものであることが認識されると同時に、また、人間に世界を照明する装置として重要な価値をもつものであることが認識される。そこでは、世界観というものの価値が抱擁しなおされ、それが観想者としての視野から主体的に活用されることになる。つまり、世界観を自己という観想者が活用することのできる「レンズ」としてとらえたうえで、存在する複数の世界観がどのように世界を照明し、また、どのように隠蔽・歪曲するのかを検討するようになるのである。こうした能力は、結果として、存在する複数の世界観の妥当性

を内部から経験する意識のダイナミズムをもたらし、そして、それらの世界観の関係性を構想することを可能とする。

こうした世界観の価値を再認識する思想活動をDavid Ray Griffin (1989)は“constructive or revisionary postmodernism”と形容する。

It seeks to overcome the modern worldview not by eliminating the possibility of worldviews as such, but by constructing a postmodern worldview through a revision of modern premises and traditional concepts. This constructive or revisionary postmodernism involves a new unity of scientific, ethical, aesthetic, and religious intuitions. It rejects not science as such but only that scientism in which the data of the modern natural sciences are alone allowed to contribute to the construction of our worldview. (p. x)

こうした発想がインテグラル思想をその根底において支えているものであることは、いうまでもないだろう。ここでは、個人・組織の領域におけるその具体的な実践方法として、Bill Torbert の“Action Inquiry”の概要を紹介する。

VL 段階の行動論理：Action Inquiry

	<i>First Person</i>	<i>Second Person</i>	<i>Third Person</i>
<i>Fourth Territory: Intentional attention (5th order cons.)</i>	<i>Intending</i>	<i>Framing</i>	<i>Visioning: visioning or re-visioning a compelling organizational mission</i>
<i>Third Territory: Action-logics (4th order cons.)</i>	<i>Thinking/Feeling</i>	<i>Advocating</i>	<i>Strategizing: strategic planning and implementation of a long-term strategy, which requires juggling logistical power, referent power, and unilateral power simultaneously</i>
<i>Second Territory: Own sensed performance (3rd order cons.)</i>	<i>Sensing/Behaving</i>	<i>Illustrating</i>	<i>Performing: accomplishing role-related tasks and short-term projects which requires using referent power and logistical power</i>
<i>First Territory: Outside events (2nd order cons.)</i>	<i>Effecting/Perceiving</i>	<i>Inquiring</i>	<i>Assessing: responding to immediate opportunities and emergencies by using unilateral power</i>

From Bill Torbert and Associates (2004). *Action Inquiry: The Secrets of Timely Transforming Leadership*. San Francisco: Berrett-Koehler.

❖ *Referent power*: power generated, not by power-wielder but by the power-yielder, by the “consent of the governed”....Referent power recognizes that if you tell colleagues

what to do, they may resist. If you ask them if they will (use their power to) help you, they are more likely to do so, so long as you reciprocate.

❖ *Logistical power*: power to reason systematically within a given structure to create a new way of accomplishing a desired result.

Action Inquiry (AI) は、自己 (I) ・他者 (We) ・組織 (Its) との関係において、垂直的に存在する各階層領域の重要課題に効果的に対応することをおして、利害関係者（個人・組織・共同体）の包括的な福利の確保を意図する統合的変容の手法である。ここで留意すべきことは、AI が、各階層領域における問題意識の妥当性を認識したうえで、それらの全てに対応することの重要性を認識するものであるということである。

もちろん、実際の実践においては、こうした認識は、具体的な「構想」 (vision) と「戦略」 (strategy) をとおして表現されることになるのはいうまでもない。「構想」と「戦略」の構築において重要となる基本原則として、ウィルバーは下記の3つをあげている (Wilber, 2000, pp. 169-170) 。

1. Basic Moral Intuition: Protect and promote the greatest depth for the greatest span
2. Prime Directive: Facilitate the health of the entire spiral of development without unduly privileging any particular wave
3. Gentle pacer of transformation for the full spectrum of human resources: Inviting people to grow and develop their full potentials—interior and exterior—to the best of their abilities

これらの基本原則は、自己の成長に取り組むうえで価値を所有するものであることはいうまでもないが、とりわけ集合体（組織・共同体）の統治の責任を負う人間にとり非常に重要になる。また、世界統治 (Global Governance) の領域においてこれらの基本原則を確立することが、人類の今世紀の最重要の政治課題であるとウィルバーは主張する (Wilber, 2000, pp. 169-170) 。

Spiral Dynamics (SD) 理論の指摘するように、VL段階以前の成長段階においては、人間は「認識」という行為が——それが「視点」 (perspective) を利用する行為であるという意味において——構造的な限界を内包せざるをえないことを自覚するができない。「視点」そのものを対象化する能力を所有する観想者としての視座に立つことができないために、結果として、自らの視点が絶対化されてしまうことになる。そして、これは、必然的に、自らの視点が抱擁することのできる世界観（価値体系）との排他的な同一化へとつながることになる。こうした排他性を基盤として世界観 (“Value Meme” or “vMeme”) 間の衝突が発生するのである。⁴

VL 段階において獲得されるのは、衝突を存在する複数の世界観を、それぞれの限定的な妥当性を認識・擁護する俯瞰の視野から、織りあわせる能力であるといえる (“MeshWork”) 。

参考資料

- Don Edward Beck (n. a.). *Stages of social development: The cultural dynamics that spark violence, spread prosperity, and shape globalization*. Available at http://spiral-dynamics.net/DrDonBeck/essays/stages_of_social_development.htm
- David Ray Griffin (1989). *God and religion in the postmodern world: Essays in postmodern theology*. Albany: State University of New York Press.
- Bill Torbert and Associates (2004). *Action inquiry: The Secrets of Timely Transforming Leadership*. San Francisco: Berrett-Koehler.
- Ken Wilber (1995/2000). *Sex, ecology, spirituality: The spirit of evolution*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (1997). *The eye of spirit: An integral vision for a world gone slightly mad*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2000). *Integral psychology: Consciousness, spirit, psychology, therapy*. Boston: Shambhala.
- Ken Wilber (2001). *A theory of everything: An integral vision for business, politics, science, and spirituality*. Boston: Shambhala.

注

- ¹ こうした過渡的段階の存在を認識することは、ある具体的な個人がどの成長段階にその「重心」 (“the Center of Gravity”) を置いているのかを把握することを可能にしてくれるものではない。それが可能となるためには、独立した「能力」 (art) としての測定能力の修得が必要となる。そして、そのためには、あらゆる「能力」の修得においてそうであるように、練達者の指導のもと、長期的な訓練が必須となる。
- ² 確かに、既存の概念では把握できない現象を認識するために新しい概念を創出することは、自らの認識能力を拡大するための非常に有効な方法である。しかし、それは、あくまでも概念の構造的な問題に対して水平的 (量的) に対応するものである。
- ³ この意味では、Mean Green Memeは、合理性段階の行動論理が支配的である過渡的段階——X (Y)とX / Y——において成長のプロセスが停滞したときに発生する「症状」ということができるだろう。
- ⁴ VL段階以前の成長段階 (Outward Arc) においては、人間の存在基盤は「意味体験」である。そして、世界観 (価値体系) は、意味体験を可能とする非常に重要な内的装置である。外的な圧力をとおして、Outward Arc段階にある個人・組織の世界観を対象化することは、必然的に、当事者の内部に確立されている存在の均衡を動揺させることにならざるをえない。Mean Green Memeの病理とは、自己の特異な世界観 (世界観の妥当性を否定する世界観) を絶対化したうえで、他の世界観を攻撃・麻痺・溶解することをとおして、他者の福利そのものを剥奪することである。Don Beckは、今日、こうしたMean Green Memeの破壊的な影響が非常に深刻なものへと肥大化していることを次のように指摘する。

“Green has introduced more harm in the last thirty years than any other meam” (in Wilber, 2000, p. 123).